
「未定」の書

哀妃紗 煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「未定」の書

【NZコード】

N9616V

【作者名】

哀妃紗 煉

【あらすじ】

天使のように優しかった主人公。しかしある日、母が家を出て行き、家庭環境が一変して悪くなり、人間を理解してしまい、悪魔になろうとした。しかし、主人公は元天使のような人だったため、良心が出てきてしまい、悪事が失敗してさらに悪い方向へと環境が進んでしまう。そんな主人公がある日、「魂転」という能力を授かつた。能力を授かつた主人公は、世の中を理解していたため、復習を行わず、幸せを得るために能力を使うことにして、幸せを追求していく物語です。

現時点での登場人物（前書き）

現時点での登場人物です。
更新もします。

現時点での登場人物

登場人物です。

- ・雪富 李秋（ゆきみや りあき）本名不明
初恋の人とアクセサリーショップに行き、そこで『魂転じんてん』という力の契約証のようなものを拾い、魂転者となる。
以降、犯罪者を捕まえるバウンディハンターになる。

孤児院などを作り、全国的に有名な権力者で、雪富 李秋を名乗っている。

魂転者としても危険人物・逆者として有名。

性格は消極的から活発に変わっている。結構適当で直感で動くが、順応性と相手の気持ちを察するなどの優れた面もある。

昔にいじめなどを受け、その経験を生かし、我流の格闘術を持っている。

・優神 雲母（ゆうがみ きらら）

主人公に最初に話しかけた人物。

行動に謎が多い。

性格は穏やかで優しい。時に天然な面を見せるときがある。合気道などを習っており、主人公でも歯が立たないほど強い。実は主人公の名前は知らない。

不馬 改人に殺される。

- ・雪富 速（ゆきみや そく）本名 城原 美由紀（しろはら みゆき）

主人公の最初の新しい家族。

過去に人体実験を受けており、身体能力は人間以上。主人公よりも早く走れるが、体力がない。

性格は負けず嫌いでツンデレ？自分では胸のことは気にしているようだが、他人に指摘されると、とても怒る。

特殊訓練を受けており、主人公にも引けをとらないが、主人公に手加減で子ども扱いのように負けることが多い。主人公のことを李秋と呼び捨てで呼んでいる。遠くから呼ぶとき、または怒っているときは秋！と呼んでいる。

・雪宮 桜（ゆきみや さくら）本名 不馬 姫華

主人公の二番目の新しい家族。

不馬 改人の妹。

性格は天然でドジッ子。料理の腕はそのときそのときで、プロ以上または失敗のどちらかで、普通はない。

語尾を『～』とのばすが特徴。主人公のことを李秋くんと呼んでいる。

・不馬 改人（ふま かいと）

主人公の最初の強敵。

初恋の優神 雲母を殺した人物。

主人公に強い恨みを抱いており、『お前が養父さんを殺したんだ！』^{とう}とよく怒鳴るが今のところ不明。

性格は積極的。主人公に会うとだんだんパニック状態になるが、攻撃は的確で主人公は歯が立たなかつた。

主人公に封印されるが……？

・天ノ姫 水城（てんのひめ みづき）

片目の『無在』でこの世に存在している。

主人公と不馬 改人との戦いに乱入し、主人公に手を貸す。

自分の名前が女の子っぽいため、そこを指摘されることに弱い。

性格はやんちゃで面白い物好き。面白いことを見つける度に『おもしれえ』と言つ。

語尾に母音をつけるのが特徴。

世界の裏側について詳しい。

・戸葉瀬 母音（とばせ ははね）

主人公の師匠。

主人公とは小学生から知り合い。

主人公に「姉さん」と呼ばせたりと結構。主人公以外にはとても優しい。

相手の行動を次々と読み、それを合氣道でいなし、完全に勝利する強者。

魂転により潜在能力が開放された主人公よりもはるかに強い。自分では主人公をかわいがつてているつもりだが、性感帯を刺激することが多いので「いじめられている」と主人公は思っている。

性格は面倒見がよく優しい。お嬢様言葉で話すが、家柄はいたつて普通。

主人公の本名を知っている数少ない人物。

・未定願（びていげん）びついがんとも言う。本名不明。

『無在』が人間に寄生する寄生空間に現れる謎の人物。実は女性。世界の裏側を全て知つており、『断言』を打ち破ることに専念している。また、大きなことにかかわっているのもともと『定願』だつた。

性格は冷静で上位から見下すような口調。『ククク』と蝉のよう

な笑い方をする。

主人公の本名を知っている数少ない人物。

・無在（むざい）本名不明。

主人公と契約している『無在』。

存在と言う言葉が嫌い。

『無在』の中でも上位に位置し、十三の魔法を全て使うことができ、さらにその上位の魔法も使える。

性格は冷静で冷たい。一人称は私。

主人公の本名を知っている数少ない人物。

・母親 名前不明。一部 ピュファイス・シユタルヴァ

「未定」の書の読み手。

「未定」の書に出てくる人物の一部と知り合いで、元その世界の住民で『呪われた天使』、『五千年後の繰者』。

性格は穏やかで優しい。『あの人』と呼んでいる夫をとても愛している。

が、他に『あの人』とお似合いの人物があり、奪つてしまつたと後悔している。

・ペペルアラ・デヴィル・シユタルヴァ 愛称 ペペル・プラ。

母親の娘。

母親と同じく『呪われた天使』、『五千年後の繰者』。

性格は元気で活発。本を読まないとなかなか眠れず、一日中起きていることもある。

・あの人　名前不明　一部　ノヴァ・シユタルヴァ
母親の夫。

・代ハラ（しろ　はら）

あの人と結ばれ続けるはずだった人物。

・カミ・シャ・ドロクス

未定願の唯一業火をうけて死ななかつたもの。

・鋼峰 紀美夜（こうみね きみや）

主人公の学校での数少ない友達。

よく男子と一緒にいることが多いが、男子からは少しうざいと思われている。

主人公とは入学した日に会つており、自分の名前と同じ部分があることからよく絡むようになった。

性格は元氣で明るい性格。

主人公のことをゆ・きみやくんと呼んでいる。

・真田 油介（さなだ ゆすけ）

主人公の数少ない友達？

誰にも等しく接しているが、会話をしてくれるのは主人公と自分の姉のみ。（両親は海外に行つており、姉と生活している）

主人公が『サラダ油』とあだ名をつけて以来、みんなに、姉にもそう呼ばれるようになった。

しかし、自分に話しかけてもらえるので、あまり気にしていない。

姉のことが大好きなシスコン。主人公によつて暴露される。

用語

- ・天使（てんし）
神に仕えるもの。
存在するものの善に存在するもの。
ミスや神への反抗で墮とされ、墮天使となる。
墮とされるとミスのものは記憶を消され、人間として暮らし、反抗したものは悪魔になる。

・悪魔（あくま）

魔族と神に反抗した墮天使。

存在するものの悪に存在するもの。

魔族はもとから存在するもので、主に吸血鬼や狼人間や猫又などがいる。（『神の打倒』を読んでいる方は魔族がいる理由がわかるはずです）

墮天使は契約で人間に力を与える。

・魂転（こんてん）

魂を吸收・与えることができる能力。

他に身体能力の超強化、魂転者・魂転の知識を持つものの殺害又は自殺以外では魂のある限り死ぬことはない。（ゾンビのような存在になる）

天使に関係しており、契約の際に自分の存在と似た存在の天使が守護する。

- ・魂転者（こんてんしゃ）
魂転の能力を持つもの。

- ・解魂（かいこん）

魂転者が魂の10年分を強化し、100年分にすること。（攻撃をうけた際に吸収される量をマイナス10倍にすること。実際に魂が増えるわけではない）

その100年分がなくなると元に戻る。

- ・無在（むざい）

どこにも存在することが許されていないもの。
故にどの空間にも存在できる。

自分が入るに相応しい器の人間と契約をし、初めて存在が許される。
契約した人間は魔法が使えるようになる。

十三の魔法を使う。

- ・十三の魔法（じゅうさんのはづ）

無在にしか使えない13個の魔法。

- 1・対象の敵とのゼロ距離に魔力を発生させ、攻撃する魔法
- 2・身体強化魔法
- 3・触れたものを吹き飛ばす魔法
- 4・触れたものの魂を全て吸収する魔族召喚魔法（吸収された魂の9割は無在に与えられる）
- 5・空間移動魔法（空間を移動する前後に黒い煙を出す）
- 6・全ての系統を持つ光線を放つ魔法
- 7・無属性の追尾効果のある弾を複数放つ魔法
- 8・術者の負の感情でできた魔族を召喚する魔法（その魔族に触れ

る又は攻撃を受けると術者の負の感情が流れ込む。

9・術者の負の感情を自分中心に広げる魔法（魔力を通さない＝魔法を無効化する）

10・光の速さで5の魔法の弱いものを放つ魔法（詠唱時間が必要）

11・負の感情を放つ魔法（術者のものではない）

12・666の悲劇（1～11・の魔法を一度に放つのを666回繰り返す魔法。詠唱時間が最低一日かかり、詠唱中は他のことを考えてはいけない）

13・触れたものの存在を消す光を放つ魔法（光のスピードは遅い。存在を消されたものは記憶なくし、無在になる）

・定願（ていげん・ていがん）
願いを叶えるもの。

存在するものの希望・夢に存在するもの。

存在するものの希望や夢を見ることができ、それを叶えるとき迷いがなければその願いは叶えられる。（自分の願いも制限はあるが叶えられる）

主に死にたくないという願いを叶え、寿命では死はない。
あるきつかけで未定願になる。

・未定願（びていげん・びていがん）

定願とは違い、迷いがあつても願いを叶えることができる。

未定願になるのは極めて稀で、主人公の中には未定願が初めての未定願。

・魔法と式法

魔法は内に魔力を持つものが使う魔法で、炎系統・水系統などがある

る。

式法は知識があれば使える魔法で、詠唱時間が必要だが詠唱時間が長いほど強力というはけではなく、知力によって詠唱時間はかわり、その人の必要最低限の詠唱時間 + それ以降の詠唱時間で強力になる。魔法と違い式法一つに一つの魔法しか使えない。

例・炎系統で魔法なら火炎放射・火球など色々使える。

式法は炎系統でも火炎放射と火球に分けられ、それぞれ詠唱時間が必要。

プロローグ

ねえ、お母さん。

どうしたの？

本を読んで。

ごめんね。もう本は全部読んじゃったわ。
ええー。

あ、でも「未定」の書なりあるわよ。
みていいのしょ？

そうよ。この本はね、読みたいて祈つてからじゃないと本文が
出でこないの。

どんなお話になるかわからないから未定なの？
そうよ。それと、この本の文章は他の世界で起きてるお話な
よ。

へえー、すごいね。

この本でいい？

うん。その本を読んで。
じゃあ、読むわよ。
うん。

影天使は動き出す（前書き）

オリジナル神話なので、普通の意味とは違う意味の存在があります。

例：普通は堕天使 神に抗う者＝悪魔が堕天使 堕とされた天使。

悪魔 神に抗う堕天使。

影天使は動き出す

母が家を出て行つてから悪く変わってしまった家庭環境。自殺しようかとも考えたこともあつた。

でも、何とか耐えることができた。

それは、優しい友達ができて、その人に会うのが楽しかったからだ。その理由は、無口な性格で友達のいない僕に接してくれたからだつた。

その人は、ゆうがみ 優神 きららり 雲母という女性で、友達が少ないこともなく、むしろ友達は多かつた。

そんな彼女の見せる笑顔は、まるで天使のよつだった。

彼女と出会つてから約半年、僕の人生が大きく変わる日が来た。それは、彼女とある日アクセサリーの店に行つた事から始まった。

「ねえ、あの店に行きましょう

優神さんが普段寄り道をすることはないのに
そう言つてきた。

どうしたのだろう?と思つた。

僕は無口な性格なのでうなずいて答えた。

そして、一人でアクセサリーの店に入った。

その店は年寄りの女性が一人で経営している店だつた。

彼女はアクセサリーに興味がなさそうに見えた。

そこら辺をうろついているだけで、アクセサリーを見たりはしていなかつた。

そんな彼女を不思議そうに見ていると、あなたもアクセサリー探しでみたら?と、にっこりと微笑んで言つてきた。

そして、僕もアクセサリーを探していると、なぜかとても気になる

キー ホルダー があつた。

それはビーナスくらいの大きさで、何か奇妙な文字が一文字書かれていた。

僕はそれを買おうと思い、値段を確認するため、手に取った。だけど値段が書かれていなかつた。

「 値段、聞いてみたら？」

彼女は僕がこのキー ホルダー を買つたのを知つていたかのように言つてきた。

そして、彼女の言つとおりに値段を聞いてみたら、それは店の物じやないから、もつて行つていよいよ。と言われた。

よかつたね。と近寄つてきた彼女がそう言つた。
まるで結果がわかつていたようで、あまり感情のこもつていらない言葉だつた。

そして、僕にもおかしなことがある。

それは、彼女とかかわつた出来事がすべて前にあつたような気がする、デジヤブが起きる。

店を出ると彼女は何も言わず、笑つて手を振つて先に帰つて行つた。

そして、僕も家に帰つて、いつものように食事をして眠つた。

「…………うつ」

突然なんとも言えない痛みが体中を襲つた。

そして、意識がもつれりつとしてきて、気絶した。

それから夢を見た。

それは青白く輝く光の中で、何かの声が聞こえてくる夢だつた。

その声は

「大いなる悲しみ・憎しみを持つ墮天使よ、『魂転』の力を授けよう。そして、その力を好きに使つがよい」

と、何度も言つていた。

夢から目覚めて、あたりを見渡すと、昨日店で買ったキー ホルダーが青白く光つていた。

なんだ……これは？ 僕は普通怯えてしまつ状態なのに吸い寄せられるようにその光のところに近寄つた。

そして、そのキー ホルダーに触つてみると、今度は不快感を感じた。そして、またあの声が聞こえた。

「『魂転』の力は、肉体をただの魂の器にする。器になつた肉体は、感じたくない五感を感じなくなり、代わりに不快感を感じる。そして肉体は再生能力が上昇し、潜在能力を發揮することが可能になる」

と、言つていた。

つまり、ゾンビになるということだらうか。

力を手に入れたと思うと、僕は固く閉ざされた口を開いた……。

「よつやく、影天使^{えいてんし}が行動できる……」

はい。今日はここまでよ。

ううー。続きが気になるよー。

じゃあ、早く寝なさいね。

うん。あ。

どうしたの？

こんな不思議なこと、本当に起りつてるの?
あらあら、私たちは『五千年後^{いっせんねき}の繰者^{よひじや}』なのよ。
よくわからないよう。
まだ初めてだから仕方ないわね。うあ、早く寝なさい。
はーい。

影天使は動き出す（後書き）

オリジナル神話なのでわからない名前があるのは当然なので、後書きで説明しようと思います。ストーリーに大きくかかわる名前の説明はしません。

影天使について

- ・影で見守り、助ける天使。一番知られていない天使。
- ・「影天使が動き出す」は知られてはいけないのに、知られようとする禁忌を犯すということ、もちろん墮とされますが、墮天使にならず、影天使のままでいられます。人間では影での人への努力が自分の力になり自分を主張出来るようになるの意味。です。

魂転契約の呪い

僕は昔から神や天使や悪魔を調べていた。

そして、僕は天使の影天使にあたる性格だつたため、影天使の契約文を書いて、報われる日を待つていた。

そして、その夢が今叶つた。

『魂転』という力を手に入れたからだ。

『魂転』は天使に関係していく、それぞれ能力が違うらしい。

天使には、影で助ける『影天使』

祈る者の前に姿を現し、助ける『光天使』

亡靈をあの世に導く『死天使』

他にも『滅天使』、『雨天使』、『王天使』

が存在し、すべての天使に共通する称号があり、墮とされた天使『墮天使』、呪われた天使『五千年後の繰者』がある。

魂転という力が本当に僕にあるのかを調べるために、実験をした。最初は恐る恐るやつっていたが、力があると自身を持ち始め、恐れをなくした。

感じたくない痛みは感じないということはわかつたため、次は再生能力の実験をしたところ

切斷しても取れることはなく3秒ほどで再生することがわかつた。この力で、自分にとつて利益のあることをするには……。

そう、考えていると、驚異的な身体能力を使って、指名手配犯を捕まえることに決定した。

早速、街中を出歩くと、みんなが奇異の目で僕を見ているのがわかつた。その理由は背中に背負っている刀だつた。

いつからこんなものがあつたのだろう。と考えながら、刀を手に取ると、またあの声が聞こえてきた。

「その刀こそが『魂転』の真の力を發揮させるものであり、それは人の魂を吸い取ることと、人に分け与える力だ」

と、言つていた。

一度に全部教えてくれないのか？と少し呆れ、人通りの少ないところを歩いた。

なぜか不快感が感じられた。あたりを見ると自動車は止まつていて、人もいなくなつっていた。

何だこれは……！？

「やつと見つけたぜ。魂転者！」

驚いていると、後ろから声が聞こえた。

振り返ると、黒い着物を着た男性がこっちを見ていた。

「ん？ 初めてか？ でも俺は手加減しねえぜ！」

そう言つと、男性は飛び掛つてきた。

うわっ、なんだ！？

どうやら彼も魂転者ようだ。

彼の行動から大体の状況とルールを理解した。

今の状況は魂転者同士の魂の奪い合いで、ルールは一定範囲内の同じ空間を作り

元の空間に被害が出ないよう、その空間で戦うらしい。

「ちっ、すばしっこい奴だぜ」

僕は何とか攻撃をかわして相手の隙をつかがつた。

僕は我流の拳法を持つていたから、そこら辺の不良達に襲われても

大丈夫だつたけど、この男性は大丈夫じゃない。

なぜなら僕はまだ驚異的な身体能力を持つ者同士の戦術はないからだ。

「ククク……。やつぱり初めてだつたか！そりやあ『解魂』かいこんできねえよなあ？」

かいこん？ そういうえば男性は着物のような服を着ている……。
ああ、まったくわからない。

少し諦めかけたそのとき、あの声が聞こえた。

「刀を握り、祈れ」

……やつぱり一度には教えてくれないようだ……。
多少ムカつくけど、やつてみるしかない。
そして僕は刀を握り、何を祈ればいいかわからなかつたが、『負けたくない』と祈つた。

すると、青白い光が体を包んでいき、光が消えて見てみると、着物のようなものに着替えていた。

「何!? 初めてじゃないのか! ? まさかおまえ……堕かれとされた影……」
「だあああああ……！」

僕は大声を上げて斬りかかつた。

気がつくと、男性は消え、元の世界に戻つていた。

「堕かれとされた影？」

僕はあの男性が最後に言つた言葉が気になつた。

はい、おしまい。

ねえ、お母さん？

どうしたの？

五千年後の繩者つて最初の方に出てきたけど、私たちと同じ人？
そうねえー、元々私たちがいた場所の出来事なのかも知れないわ
ね。

元々の場所？

その話は明日しましょうね。

はあい。

怒り……

僕は初めて戦つたあの日から力について考えていた。

力について整理すると、力が最大限に発揮できる場所は元の空間を一定の範囲コピーした、別空間で、

発揮するには、その空間で『解魂』を行はなければならない。

『解魂』は自分の魂の10年分を10倍にして、100にすることができる。

また、100が尽きたと、元に戻ってしまう。

つまり、戦いではその100を戻させて元の状態になつたところを攻撃することが必要になる。

あとは自分が持つ武器を使つことで100が少しづつ元に戻っていく。

大体のことはわかつたがあの男性が言つていた、墮とされた影はまだわからない。

「何考へてるの？」

あ、考え方をしていて優神さんと一緒に登校しているのを忘れていた。

「昨日は学校休んでいたけど、何があったの？」

僕は首を振つてなんでもないと答えた。

これからは学校を休むことが多くなりそうだ。

しかし、指名手配犯を探すことは難しい。

力のおかげで負の感情を持つ者や魂転者を察知することは出来るけど。

犯罪者以外にも負の感情を持つ者はたくさんいる。

これは時間がかかりそうだ……。

それからコースやネットで調べていると

犯罪者の過半数は魂転者だった。

ということは、魂転者を探せばいいということだ。

そして僕は学校をしばらく休み、魂転者を探した。

魂転者探しをし始めてから2ヶ月

指名手配犯は意外と簡単に見つかり、警察からの報酬で
だいぶお金が集まつた。

たくさんの魂転者と戦つて気づいたことは

僕は他とは違い、拳や刀に青い光をまとっていることと
その光は良心の光で、自分の欲望のために使うのではなく
正義のために使つてているかららしい。

そして、2つ噂になつてゐるつことがあるのがわかつた。

1つは、闇をまとつてゐる化け物がいると言つ噂。

2つ目は、魂転者のギルドが最近できてゐると言つ噂。

そして、僕は魂転者の間で反逆者として

謎の正義者として一般では有名になつた。

僕がその謎の正義者とバレていらない理由は

僕は元の空間でも『解魂』を行うことができると

『解魂』を行うと容姿が変わるからだ。

そうして集まつたお金で孤児院を建てた。

久しぶりに学校へ行つた。

僕を覚えてゐる人は優神さんしかいなかつた。

僕は学校の授業についていけず、途中でサボつた。

優神さんはそんな僕を心配して何度も授業に出たら?といつてきただ

けど僕は大丈夫と言つて、サボつた。

優神さんは僕が初めてしゃべつたので見逃してくれた。

そして、学校は終わり優神さんと一緒に下校した。

優神さんはなぜか怯えていた。

何かに怯えていた。

そして、僕に手紙を渡して、帰つたら読んでと言つた。

僕がその手紙をホケッティにつまむたとき

優神さんは宙へと飛んだ。

僕は驚いて声が出なかつた。

優神さんは何かに当たつて

飛んだのと逆の方向へ振り向いた。

すると目に入ったのは、笑いながら僕を見ている

着物を着た同じ年くらいの少年がいた。

僕はまた驚いた。

少年は『解魂』の状態でいたからだ。

少年は笑い終わると

俺は不馬改人。今は精神的にショックを受けているから見逃して

中華書局影印
元和十一年

卷一百一十一

儀は正氣に用る。儀有る人のことを恐れぬ。力

見てみると
優祐さんは死んでいた

僕はそれが信じられない。何度も指で手たり叩くたまに

てもモニ起きたし

!

お腹が痺れるほど叫んだ。

わざとまで生きていたのに……！もう動かない……。

叫び終わると、怒りがこみ上げてきた。

「……不馬改人、絶対に許さない！』

今日はここでおわりよ。
なんかとてもかわいそうだね。
そうねえ……、愛する人を失うのは悲しいわね。

お母さん。昨日の話は？

あ、それはね、今私たちがいる場所はね、お父さんが作った場所なの。私たち天使がいたのは地球と言つ場所なのよ。

へえー、そうなんだあ！

話は終わりよ。もう寝なさいね。
はーい。

影天使は正しい道を歩む（前書き）

今回は主人公は出てきません。

影天使は正しい道を歩む

万華鏡の中のような空間に男が一人いた。

「ククク……姫が死んだか……」

男がつぶやいた。

「ん? 誰だ。ここは私しかいないはずだが」
その男にもう一人の男が近づきながら言った。
すると男は妙なことを言った。

「久しぶりだな『無在』……いや、初めましてといふほうが正しい
か?」

「誰だと聞いている」

『無在』というもう一人の男は聞き返した。
しかし、また妙なことを言つてくる。

「ふむ、俺か?好きに呼べ」
「ふざけているのか?」

『無在』が冷静に言い返すと
男は別の話をし始めた。

「今日は『母体』^{ほたい}と聞いているが、どうなるだろ?」
「何を言つていいる」

『無在』は男に聞くが、男は話をやめない。

「彼が失敗をしなくても他が失敗すれば意味は無いな」

男は額に手を当てながら『無在』の方へ振り向いて尋ねた。

「『無在』、お前もこいつの契約者だろう? 何か思わないか?」「……さあな、こいつは『影天使』だということはわかるが」「そうか……。ククク……、何度も聞いて同じか……」

そう言つと男は額に当てていた手を下ろし
上を向いた。

『無在』は男の言葉が理解できず

その男を黙つて見ていた。

すると男はつぶやいた。

「ふむ、初めての反応だな」

『無在』は妙な事ばかり言つ男にもう一度聞いた。

「お前は誰だ?」

すると男は上を向いていた顔を『無在』に向け
答えた。

「さつき言つただろう。……ふん、人間と契約を結ばなければ何も出来ない存在が俺にそんなことを言えるのか?」

「なつ」

『無在』は後退りをした。

すると男は近づきながら自分のことを言った。

「俺はお前達とは違う。お前達みたいな天使でも悪魔でもない奴『無の存在』とは違う」

「じゃあ、お前は何だ私達『無の存在』と同じじゃないのか？」

「俺はお前達のように名前は無いが『定願^{ていがん}』という部類に入る者だ」

男の発言に『無在』は混乱し頭を抱えた。

男は止めを刺すように『無在』に言った。

「神や天使は善に存在する。悪魔は惡に存在する。しかし『無在』は何にも存在するところが無い」

『無在』は混乱しながらも対抗した。

「お前はなんだ？お前も私達とは違うだけで存在するところはないのだろう？」

しかし対抗はあっさり意味をなくした。

「俺『定願^{ていがん}』希望や夢に存在する。……が俺は事情により『未定願^{びていがん}』となつたが存在するところはある」

「くつ……」

『未定願』は言い終わると後ろへ向き歩きながら『無在』に言った。

「俺達で争つても意味は無い。今は『不馬改人^{ふまかいと}』が邪魔だ」

今日の分は終わりよ。

今回のは何だったの？

うーん、それはたぶん契約者じゃないかしら。

へえー。

私が何を言いたいかわかるかしら？

うん！ もう寝なさいでしょ。

うふふ。じゃあまた明日ね。

うん。おやすみなさい。

五千年の約束

優神さんが死んでから一年。

優神さんがくれた手紙には

『五千年後にまた会おうね』と書かれていた。

よくわからなかつたけど、その約束を守ることにした。

あれから僕は不馬改人を探し続けている。

しかし、見つかる以前に情報すら全くない。

この一年間で得た情報は二つだけ。

一つはギルドに所属していること。

二つ目は妹がいること。

二つ目は意味のない情報だ……。

ギルドに所属していると言つても

ギルドはたくさんあるからわからない。

今確認できているのは五つだけだ。

ギルドの他にもグループと言う集団があり、
情報はあまり役に立たない。

ギルドとは50～100人以上の組織で
ギルドに入つていると、自分が死んだとき、
助けてもらえるなどプラスの面がある。

ただし、他が死んだとき、魂を分けなければならない。
僕にとつては殺しても蘇つて、また魂を大量に奪うから

厄介な組織だ。

そしてグループとは3～10人程度の集団で、

群れて魂転者を襲つたりする。

厄介だがギルドとは違つて死んでも助けることはない。
僕は何度も襲われたが、何とか勝つことは出来ている。
しかし、ギルドでも群れるギルドが最近出来たらしく、
そのギルドに会つたら僕は死んでしまうかもしない!

「今日は曇りか……」

僕はそうつぶやいて不馬改人を探しに外へ出た。光が射す隙間もないくらいの曇り空。

僕の体は日光に弱い。

視力の低下、体力の消耗など体に異変が起きるから曇りは僕にとってはいい天気だ。

この異変は魂転者になつたからではなく、生まれつきのものだ。

「はあ～」

ため息をして空を見上げた。
すると、雨が降ってきた。
その雨は強く、勢いよく、でも小粒で痛くなく、
むしろ優しかった。

「まるで僕みたいだな」

強く必死に幸せに向かつて走つても届かない……。
僕は雨に親近感を感じた。

雨は一番好きな天氣だ。

なぜか力がみなぎつてくる。

雨は急に大粒になり、ザーザーと音を立てる大雨になつた。
雨に気をとられていて気づかなかつたが、
周りに大量の負の感情があり、迫つていた。
群れるギルドが来たらしい。

いくら僕が青い光を持つても、

100人以上はさすがに勝てない。

「約束……守れそうにないな……」

もう終わり?

そうよ。もう終わり。

じゃあ、もう寝るね。

そうね、もう寝なさい。

うん。知に溺れるといけないもんね。

……おやすみ。

(……やつぱりあの人の子ね。

『知に溺れる』って考えつくなんて)

片目の無在

「くつ……」

群れるギルドに襲われて十分。

必死に戦っているが、勝てる気は全くない。

「うあああああ！」

刀を左斜め下から右斜め上へと振り上げる。
しかし、相手の体制を崩せない。

相手は訓練しているようで、連係がすばしく、
一対一ならたとえ少林寺拳法家でも勝てるが
大人数しかも100以上は無理がある。

相手の作戦は弱い一撃を何度も当てる徐々に魂を
奪っていく戦法だ。

一瞬の隙を突かれ一撃を確実に当てられる。

そんな状況下で十分も耐えるのは僕だからだろう。

僕の戦法は相手の攻撃を読み、隙を突き攻撃する戦法だ。
だから相手がどのように攻撃を仕掛けてくるかはわかる。

しかし、よけれないものはよけれない。

右、上、左右からの三連続フェイント、左からの斬り上げ……
わかっていても避けることも、防ぐこともできない。

自分で編み出した戦法は合気道に近い。

優れた直感力があれば最強といえるだろう。
だが複数では無力だ。

だから僕は複数でも対応できる戦法を考えた。
それを試すときは多分今だろう。

僕は少しかがんで左に回転して、365 の範囲内にいる

全ての相手の攻撃をいなし、カウンターを当てた。
そして青い光をまとい、それを回転しながら放つた。

「よし……」

「ククク……やるな流石『墮とされた影』と言つた所か？」

掛けられた声は聞き覚えがあつた。

恐る恐る声の方向へ振り向くと、不馬改人がいた。

「お前よくも優神さんをおおおお！！！」

怒り狂つて攻撃を仕掛けたが、あっけなく避けられた。

「殺したのは復習だよ。覚えていないのか？」

「俺の養父さんを殺したこと…」

「なつ何だと？」

「忘れたのか！？」「二年前にお前が殺したんだ！」

「何を言つている！僕がこの力を手に入れたのは
お前と出会つた少し前だ！」

「嘘を吐くなああ！確かに養父さんは言つたぞ！
雪富李秋と名乗るやつにやられたつてえええ！！」

「バカな！？僕がその名を名乗つたのはつい最近のことだ

「嘘だあ嘘だ嘘だ嘘だああああああ！！！」

彼が叫んだことから察した。

もう話は通用しない……。

不馬改との戦いが始まって一分。

一気に追い詰められた。

一対一なのに！攻撃は読めるのに！攻撃がかわせない！？

「もうダメか……」

そう思つたとき、上方向から何者が落ちてきた。

「ハハハハハあははははあー。面白い事やつてんじゃねえーか。
お前ら強そうだなあ？どつちも殺つちまおうか？
……いや強い方を殺つてやるぜえええ」

その男は左目に眼帯をしていて、右目は爬虫類のようだつた。
その男は不馬改人に襲い掛かつたかと思えば、
こちらに振り返り、不気味に微笑んだ。

「こりやまた面白いなあ。お前『無在』との
契約者だろ？」

何のことだ？と口は動いたものの言葉にはならなかつた。

「へ～もう一つ面白いじやねえかああ。
自覚なしとはなあ！お前最高……ん？」
「邪魔をするなああああ！」

男が話している隙に不馬改人が男に斬りかかつた。
どうやら不馬改人は刀の一ノ刀流のようだ。
しかし、男は指先一つで遠くまで吹き飛ばした。

「何びびつてるんだお前？魂転者は魂にダメージ与えねえと
意味ねえんだぜ。それよりお前、複雑に魔力が絡みついて
いやがるぜえ。こりやあ、たくさんの魔方陣、契約書
書いてるだろ？だから自覚がねえつてか」

男はこちらが答える間もなくしゃべり続けた。

言つてこることは意味不明だが、
僕が『無在』との契約者だといふことはわかった。

「ん？お前まさか……呪われた天使とまで契約してゐるの……か？」

「…………どうことだ？」

「なるほどこりやあ、さらばおもしれえなあ……、
だが危険すぎるなあ。お前、絶対五千年後まで一回死ぬなよー。」

また五千年後……一体どうことなんだ……？

終わりよ。

ねえお母さん？

なあに？

『未定願』ってなあに？

さあ私にもわからないわ。

そうなの？

そうよ。『めんね。

いいよ別に。じゃあおやすみなさい。
おやすみ。

(『未定願』彼はまだこの世にいるかしらへ)

「どういふことだ?」

僕は男に聞くと立ち上がり、服についた砂をはらつた。

「ククク、俺もよくはわからねえ。……が『無在』についてならよ
おくしつてるぜえ」

男は呪われた天使についてはよく知らないらしい。

呪われた天使?どこかで……あ!確か『五千年後の縁者』……。確
かに詳しい情報はない。

そのことには諦めて『無在』について聞くことにした。

「『無在』とは何だ?」

「ああ、『無在』ってのは、どこにも存在が許された場所がねえや
つのことだ。

だから『無在』は人と契約して人間の存在の中に存在する。どちら
かというとだな、人間が頼んで契約するんじゃなくて、『無在』か
ら契約を要求される。と言つたところだ」

「じゃあ、どうやって契約するんだ。僕は要求された覚えはない」

そう訴えると男は眉間にしわを寄せた。

「……頭はいいみてえだなあ。まあ、お前はいくつもの魔方陣・契
約書を書いてるからなあ、稀だか契約書を書いたときと偶然同時に
要求されたつてことだ。

……『無在』と契約して悪いことはほとんどねえ。潜在能力を少し
開放してくれるし、弱いが魔法も使える。お前が青い光を放てるの

はそのおかげだ。悪い点は強い負の感情を感じると意識を乗っ取られる可能性があるだけだ」

男の言つてこいることは理解できた。しかし、強い負の感情を感じても『無在』に意識を乗っ取られたことはない。それが一番の疑問だ。

「僕は意識を乗っ取られたことはない……」

下を向きつぶやいた。

「それはだなあ、お前が『五千年後の繰者』と契約しているからだ」

「…………！」

「そいつと契約すると死ぬ可能性が減るからなあ。…………だから、意識を乗っ取られると高確率で死ぬんだよ」

「なるほど……」

「…………言い忘れてたが俺は『無在』だ

「何！？」

『無在』…………『無在』はどうにも存在できないんじゃ…………まさか。

「ククク、わかったみてえだな。そう俺は乗っ取られていた」

乗っ取られていた？といつ！」とは『無在』じゃないのか？……ああ、変な気分だ。

「俺は乗っ取られていた。つまり俺は乗っ取られてから逆に乗っ取つたって訳だ」

「……とこう訳でだなあ、お前に協力してやるぜ。じゃあな。……」

「……とこう訳でだなあ、お前に協力してやるぜ。じゃあな。……」
「ああ、忘れてたぜ、俺の名前は天ノ姫てんのひめ水城みずきだ」

男はそう言うと去つていった。

気がつくと元の世界に戻つていた。

「……天ノ姫水城。何故かそいつと戦わなければならぬような気がした。」

*

「ほう、もうあいつと出合つたか……今回は早いな」

「……『未定願』、また来ていたのか」

「お前はこんなところにいて楽しいか？」

「……契約する前よりはな」

「まあいざれお前はこいつを乗つ取ることになる。任せたぞ」

「任せると？お前がやればいいではないか」

「俺にはできない。ちょっととした誤作動でな……」

「お前……いや、任せるとはどうこうことだ？」

「お前にこいつの命を任せると……」

「乗つ取つたときに殺すなど？」

「そう言つことだ。……あとみんな誤解しているが俺は女だ」

「！？……どうこうことだ？紹介でも『男性』とされていたハズだ」

「何のことだ？……そう言つのは『真の真の神』に言つてくれ

「……もういい」

「ククク、頼んだぞ」

「はい、終わり。」

『未定願』が女性だったのはびっくりしたねー！
うふふ、そうね。

……おやすみなさい。

おやすみ。

(どうしたのかしら？それより彼はもともと女だったのは本当みたいね)

カナシミナド キウ.....(前書き)

第一章はこれで終わりです

カナシミナド モウ……

天ノ姫水城が去つてから、一人雨の降る中で空を見上げて立っていた。

「『雨天使』でもさまよつているのか……」

つぶやいてから家へ向かつた。

帰りたくない家に帰る。

帰つてくるのを待つ人はいない。

自分の力を過大評価していた。不馬改人は強い……しかし天ノ姫水城はもつと強い。

まだ他にもたくさんいるのだろう。

そんなことを考えていた。

しかし、不馬改人は倒すしかないと思った。それは自分が初めて死んでほしくないと願つた唯一の存在を殺したからだ。

クラスメイトが死んでも、家族が死んでも何も悲しいとは思わなかつた。そんな自分が死んだら悲しいと思つた人。

初めて愛した人。心から愛した人。でもその人は殺された。

事故でもなく、病気でもなく、殺された……。

考えていると怒りがわいてきた。

そして、家に帰らずに不馬改人を探しに行つた。怒りに我を忘れて

……。

気がつくと廃墟はいきょとなつた工場にいた。

その工場は2kmかける4kmの8km?広い工場だった。

「よくここがわかつたな」

突然声を掛けられた。が、見渡してもだれもいない。

「うーだ。上だよ」

言葉通りに上を向くとそこには不馬改人が空中にいた。
なぜだ！？高く跳ぶことはできても浮遊はできないはずだ。
しかし、実際に空中に浮いていた。

「ククク、『無在』って知ってるだろ？」

「まさか！？」

「その通りだ。俺は魔法の力で浮いている」

「いつも契約者だったとは……。一体どうしたの……

「いつまでも会話してると恩つなよー。」

いきなり襲い掛かつってきたので反応しきれず、攻撃を受けてしまつた。

「……っ」

「甘いんだよお前はー！」

いくら脅威的な身体能力を持つていても、差はある。しかし、不馬改人との差はありすぎる。最初から勝ち目がない戦いといつことは覚悟していくても、いざ戦うとなると恐怖で動きが鈍る……。

「お前はなぜ僕を狙う！？」

「前にも言ったはずだ！お前は養父さんを殺したんだあー！」

叫びと同時に振り下ろされた刀は重く、地面に足が沈んだ。

「くそつ」

足は深く沈んでいるためなかなか抜けない。

その隙に改人は容赦なく攻撃を仕掛けてくる。

強い一撃を受け、体が吹き飛んだ。

そして、コンクリートの壁にぶつかり、体が埋まってしまった。

「おじおじ……戦うなら俺を呼べよなあ？こんな面白いことに俺をのけ者にするなんぞあ……まあいい、手伝ってやるぜ？」

そう言つて天ノ姫水城は僕の体を壁から引っ張り出した。

「お前はなぜ僕を助ける？」

「は？ そんなもん決まってるだろが。世界はこんなにも美しく、すばらしい。そして、面白いことがたくさんある。お前はその面白いことの一部だからだ」

『世界はこんなにも美しく、すばらしい』か。本当にやつだらうか……。

理解はできだが、いくつか疑問があつた。しかし、今はそれどころではない。

「ふん。一対一とはなかなかじゃないか……」
「がああははははは……お前は俺に勝てねえだろ？」
「さあどうかな？」

改人はそう言つと空中に円を描いた。すると魔法陣のよつなもののが現れ、その中から幽霊のような何かがその描かれた円から出でてきた。

「ほおひ。お前も『無在』の第三魔法は使えるようだな」

「第三魔法?」

僕はそう聞くと『無在』の使える十三魔法の三つ目だ。と説明してくれた。

つまり、『無在』は十三の魔法を使って、第一・第一一・第二……と順に現在使える魔法があり、例えば、第五魔法を使えるところは第一から第四まで使えるということらしい。

「ククク、でもその第三魔法は俺の前じゃ意味ねえぜ!」

水城はそう言って空中に円を描いた。すると改人と同じように魔法陣が現れた。

そして、改人の出した幽靈のようなものはその中に消えていった。

「ちつ……

「ククク……

「やはり、ぬけがら不魂的非生命体は一つ門があるとそこしか通れないのか

!?

「雪窗と言ったか?俺はお前の援護だあ。だからお前がそいつを殺れ

子供のように目を輝せて水城はそう言った。

そして僕は思いつきり刀を振り、その一撃が改人に当たり、改人は吹き飛んだ。はずだった。

「馬鹿め!」

攻撃は命中して手ごたえはあったが、改人は吹き飛んでいなく、そ

「に浮いていた。

驚いていると、その隙にまた強い一撃を受けてしまった。

「ククク、驚くのは無理はない。俺の魔法は態形を維持することだ。
まあ、維持だからその場に浮くことしかできながなあ！」

さう追い討ちを掛けられ、大量に魂を取られてしまった。

「くそお！」

「お前、ふりいんじきめい封印式法できねえのか？」

悩んでいる僕に水城は問いかけてきた。

「なんだそれ……ぐあ」

戦闘中に質問はやめてほし……。が、重要なことみたいだから
聞くことにした。

「なんだよ知らねえのかよー堕とされた影なのにか？」

「だから何だ！？」

「わかつた教えてやるわ。青い光を全身にまとつてみろ。そうや
わかるはずだ」

言われた通りにしてみると、『式法』の情報が頭に流れてきた。
これはあの声じゃないのか……。そんなどつでもいいことを思つ
た。

「どうだ？ わかつたかあ？」

「……ああ」

□では説明できないことだった。ただ本能・直感のままに体を動かした。

改人を上に討ち上げ、下に刀で叩き落とし、それを追いかけて落下し、改人が地面落ちると同時に刀で突き刺した。

「ぐはつ」

改人が初めて声を上げた。それを聞くと心の奥から勝つたという気持ちが溢れてきた。

そして刀に力を込めた。すると、魔法陣のような円が地面に現れ、上空に向かつて強い光を放つた。

「ぐああああああああ……！…？」

改人の叫びが聞こえたかと思うと光は消え、改人の姿は見当たらなかつた。

「勝つた……のか？」

「ああそうだ。しかし、本当に『式法』使えるとはなあ

「？使えなかつたかもしけなかつたのか！？」

「ああ」

水城はうなずくとケラケラと笑い、去つていった。

「ふうー」

ため息を吐き、終わったことに自覚を持ち、天を見上げた。

「悲しみはもう……終わった」

しかし、見上げた空はまだ雨が霧のよつて降っていた。

終わり。

ねえ？まだお話は続くの？

続くわよ。

よかつた。

でもお母さんじばりへ出かけなくちゃいけないから、じばりへは本を読んであげられないわ。

……我慢するよ。

いいこね。

あーそういうば、お父さんはいつ帰ってくるの？

そうね……。あの人はとてもとても長い旅をしてきて、時間の流れを忘れているし、今も旅をしているからまだまだ帰っこないわよ。

そうなの？

そうよ。

ねえ、お父さんのお話してよ。

だめよ。本読んだんだからもう寝なさいね。
はい。おやすみなさい。
おやすみ。

カナシミナド モウ……（後書き）

第一章読んでいただきて、ありがとうございます。
とりあえず、少し解説をします。

式法とは決まっている魔法で誰でも知識があれば使えます、その決
まっている魔法の理解力が高ければ高いほど強力な威力を発揮しま
す。

逆に魔法とは決まっていない魔法で『無在』の契約者しか使えま
せん。威力は契約している『無在』の力で左右されます。

新しい家族（前書き）

前回から 中二～高一で3年経っています。

本編のスタートです。

主人公は自分は強いと言つ自信から、消極的な性格から変わっています。

新しい家族

不馬改人を殺し……封印してから約3年。新しい家族ができた。

親の再婚ではなく、僕が孤児院の子を兄弟という形で引き取つたからだ。

雪宮李秋で引き取つてはいるから親には気づかれてはいない。もちろん、別の家に住んでいる。

そして今、その家族の家に向かっている。

血のつながりはなくても心のつながりはある。

その家族は今は女性一人だけだ。別に女好きと言つわけではなく、女性の方が気が合うからだ。

もしかしたら優神雲母さんのことや母がないことからかもしけない。

「まあ、どうでもいいか……」

つぶやき、まだ太陽も昇つていらない朝の道を歩いた。

家族の家の前に来た。でも用心しないといけないことがある。

「ピンポーン」

インター ホンを押してしばらぐするとダッダッダッと足音が聞こえてきた。

そして……ドアが外れて「ちりり」と飛んできた。

「うわー」

「あら? 李秋じゃない、どうしたの?」

ドアの下敷きになつてゐる僕にて、ドアを飛ばした本人が何事もなかつたかのように話しかけてくる。

「またか……」

「また訪問販売の人と間違えちゃつた」

「一度も来たことないだろ。訪問販売の人なんて」

この騒ぎはいつものことなど痛みは感じないこともあつて、もうあまり気にならない。

気にならないと言つても、ドアを蹴り飛ばすのは正直やめてほしい。

「今日は早いわね」

「お前は何時に起きてるんだよ…………」

「こつちが先に質問してるんだけどビー！」

「そんなに怒るなよ。…………お前が寝てるときなりドアが飛んでこないで済むからだよ」

「そんなこと言つて寝込みを襲つてしまつなんぢゃないの？」

「そんな貧相なのを襲うかよ」

「それって私の胸がないつて言いたいわけ！？」

まつたくうるさいやつだ……。

雪富速ゆきめいそく、それが彼女の名前。とても足が速いからそう名づけた。最初は嫌がつていたが今はあまり氣にしていないらしく、呼んでも殴らなくなつた。

しかし、その代わりにインターホンが鳴るたびにドアを飛ばすようになつた。

そろそろ騒いでいる速を止めるか……。

「僕はそんなところは気にしてなこない。さつきのま驢ま驢だ」

「……あつそづ」

実際に速の胸は無に等しい、といつか無い。

速は指摘されるととても怒るが、普段は気にしていないうらしく、夏に上半身裸でいることがある。

聞いたところ、見られて困るサイズじゃないから別にいいんじゃない?と言われた。

僕としては暑いと脱ぐ癖を直してほしい。一応女性だし……。

「季秋、あんた上がるなら早く上がりなさいよ。」

「ああ。まだ桜は起きてないのか?」

「当たり前よ。今何時だと思ってんの?」

「そうか」

ああ……もう一つ直してほしことが……。

「ドスン!!」

「うわっ!?」

「また桜落ちたみたいね」

雪富桜。

毎回ベッドから落ちて畳を覚ますことが直してほしいこと

このだ。

「寝相の悪さは直らないのか?」

「直らないわよ? 天然だし」

「……」

まあ、床に布団を敷くと寝坊することになるナビ……。

とりあえず僕は朝食を作ることにした。

速と桜の朝食は毎回僕が作っている。僕がいないときは桜が作ることになるけど。手を切つたり、火傷^{やけど}をしたりするから心配だ。

……が、桜の方が僕より料理は上手だ。

「速お姉ちゃんおはよっ」

「あ、おはよっ」

「おはよっ。桜」

そういえば桜はいつから速をお姉ちゃんって呼ぶようになったんだろう？

年は桜の方が3歳も年上なにこ……。

驚くことにみんな同級生だ。速は天才なので本来は中3だが高2で、桜は留年して高2。

「あ、李秋くん来てたんだー！……『ごめんねパジャマで

「べ、別に気にするなよ。一応ほり、家族だし」

「そうだね。あはは」

みんな同級生なのは驚いたが、一番驚いたことは桜の本名は不馬姫花めかで、不馬改人の妹ひめだったということ。まだ僕が不馬改人を殺したこととは伝えていない。

「桜。料理手伝ってくれ」

「うん」

いつ見ても可愛いな、桜は……。

消極的な性格じゃなくなつたけど、告白するのは少しためらいがある。

「ピンポーン」

インターホンが鳴った。……が、今は手が離せない。

それよりも大事なことがある。

「速。ドア蹴飛ばすなよ」

「…………わかったわよ」

そんなに残念そうな顔をしなくても……。まあ、仕方ないだろ？
速にとつてはストレス解消法の一つだ。

「李秋！密よ！」

「あ、ちょっと待つてくれ。桜ちょっと料理やつといてくれ

「う、うん

こんな時間に、しかも僕の家でもないのに僕に用があるなんて……まさか！？

急いで玄関に向かうと一人の女性がいた。

「はじめまして、…………えつとその、ここって孤児院ですか？」

予感が的中した。やっぱり捨てられた子だった。

「あの…………あなたが妙…………あつ、李秋さんですか？」

なつ…………、僕の本名を知っているのか！？

おしまいよ。

そういうえば主人公の本名って出てこないね。

確かにそうねえ。

おやすみなさい。

え？…………本当にこの本が気に入ったのね。

(そういえば、あの人の本名も知らないわ。
……そんなことも知らないのに結婚してたなんて……うふふ、帰つ
てきたら聞かなくちゃね)

転校生

僕の本名を知っているのか！？

……そんなはずはない、僕は死んだことになつているはず。学校でもあまり名は知られていなかつたしつと聞き間違いだろう。

「あの、どうかされましたか？」

「えつと、はい、そうです。……さつき言いかけたのは？」

「あ、それは……私の知つている人に似ていたので……」

「そ、そつか」

そう言つうとか。しかし、僕の名前を覚えている人がいたなんて。

「とりあえず、上がつてください」

「は、はい」

礼儀正しい人だ。しかも美人……どこかの凶暴な人とは違うなあと、思い、ため息を吐いた。

「……あんた、私のこと考えてないかしら？」

「は？」

「どうせ私と比べてたんでしょう？」

なんて鋭いやつだ。速は僕と同じぐらい人の心を読むのが得意だ。

「あんた、歯あくいしばりなさい……つて、痛み感じないんだっけ？なら思いつきり殴つてもいいわよねえ？」

「いや、さすがに意識飛ぶって」

そう言つて僕は逃げた。

確かに痛みは感じない。でも、意識は飛ぶ。速の攻撃力は……實際不馬改人より高い。

「逃がすかあああ！」

「うがつづ！…！」

逃げれなかつた……。普通の人なら死んでいるだろつ。
速にはうわさがある。それは、人体実験の被害者やとある特殊部隊の隊長だとか……。

そんなことあるわけがない。だが速は新幹線並みに足が速い。
魂転者でもそこまで足の速い者はあまりいない。因みに僕は速より足は速い。

速は魂転者かもしれないと思つたが、別の空間（以降、複数空間とする）に連れ込むことはできなかつた。

「危うく意識飛ぶところだたぞ」

「あんたが悪いのよ」

まあ、蹴られなかつたからマシな方だらう。首が飛ぶだらう。
実際にこの前腕ぢあきが千切れた。と言つても体から離れたわけではない。
3秒ほどで治つた。

「李秋くーん。料理焦げちゃうよ～！」

あー忘れてた。桜は60%の確立で失敗するんだつた。
あわてて台所へ走ると、まだ焦げてはいなかつた。が、桜は火傷をしていた。

「桜、大丈夫か？」

「うーん。火傷しちゃつたよおー」

か、かわいい……。つてそれど「うじやないな。

桜の手を水で冷やすため、蛇口に手をのばしたら、出しつぱなしにしてあつた油を倒してしまい、駆けつけて来た速にかかつてしまつ

「あ」

料理にかかる火はつかなかつたものの、速の感情に火がついてしまつた。

「あーんーたーねえー！ー！ー？」

柳家金語

數分後

「結局料理焦げちゃつたね」

「あつたぐ
ね縁せ」

お前があんなことで怒るからだよ……。

「あ、あの」

「私は何をすればいいんでしょうか?」

あ、こちも忘れてたよ……。

大体の説明を彼女にすると、本題に入った。

「あなたの名前は？」

「名前……ですか？」

「うん」

「えっと……その……」

「ああ、そういうことか。
捨てられたから、苗字も名前も使う権利はないと思つていてる。とい
うことはたまにあることだ。

「言いたくないなら別にいいよ」

「あ、はい」

「名前は後回しか……。まあ、別に問題はないだろ？
次は学校の転校先だな。

転校しなければならない理由は、捨てられたことや面談にこないな
どでいじめられる可能性があるからだ。

「転校先は僕が通っている学校か、速たちが通っている学校か、ど
ちらかになるけど、どっちがいいかな？」

なぜ別々かと言つと、速が暴れる可能性あるからだ。桜は速のこ
とを『お姉ちゃん』と親しんでいるので速の通う学校にした。因み
に学校は駅から反対方向。

「えっと、では李秋さんの学校をお願いします

よかつた。速のことだからスタイルのいい彼女をいじめる可能性
があるからな。

「よし、じゃあ学校に連絡するから少し待つて」
「はい」

学校に連絡……今の雪富季秋の権力ならば、編入試験なしでも転校させることができる。しかも、クラスも指定できる。
やっぱり同じクラスがいいかな。僕のとなりの席の方が名前のこととか、これからのことも話しあえる。
学校に連絡をして、お願いすると、即答で了承された。
この学校は金が足りなくて、設備とかが悪くて受験者がどんどん減っていたからなあ。

「あ、そうだ速。この人にこの家の案内してやつてくれ」
「何であたしが！あんたがやればいいじゃない」
「僕は料理作らなきゃならないからだ」
「……じゃあ、桜に頼べばいいじゃない」
「桜には料理の手伝いをしてもらう。お前は料理できないし、だいたい覚える気ないだろ？」
「うつ……わかったわよ」

何かと文句を言つてくる速。しかし、あれでも怒つているようでは楽しそうな顔をしている。
こんな風に本気で怒れることがなかつたのだろうか。
そんなことが感じられた。
確かに最初に会つたときは凄かつたしな。

「料理作るか。桜」
「うん」

料理の心配は桜だけだが、速の方も気になる……。

なんだか2階、騒がしいな。もつ肯かしているのか？

「ちよつ……！何……るの……？嫌……！」

「そん……めて……やめて……！」

どうやら肯かしているようだ。

でも速の声は動搖しているように聞こえた。

速が動搖している！？いつたい何があったんだ！？

終わり？

そうよ終わりよ。

ちよつと先がきになるよ～。

じゃあ？

うん寝るね。おやすみなさい。
おやすみ。

転校生（後書き）

転校生とか言つても学校にまだ行つてませんが
してきしないでください。

タイトル考えるのも結構難しいので。

過去の速(前書き)

速視点です

過去の速

ありえない……。そう思つた。

こんなやつが私の過去を知つているなんて……ありえない。

「な、何言つてるのよ……！？」

「ですから、初めまして城原美由紀さん」

「…………？」

何で！？私の本名を知つているの！？

「……実際には以前に会つてますけどね」

「あんたなんか私はしらない！」

「覚えてないのも無理はないですね……。本当に覚えていませんか？あなたが組織に入ることになつた、あなたに眞実を教えて、あなたが組織を抜けることになつた原因を作つた……私を」

あの時の！？

確か私が組織に入るきっかけになつた事件

私が5才のころ。

「…………お母ちゃんとお父ちゃんは同じ？」

あのころの私はそこがどうこうの場所かは知らなかつた。

「…………あなたが……あなたを強くしてくれるとこよ」

「やつなの?……お母さんとお父さんは?」

そこには今私の田の前にいる人がいた。

年齢は見た目では10代くらい。年を取っていない……。

「あなたのお父さんとお母さんは死んだわ」

「嘘……そんな、何で?」

「事故で死んでしまったわ……」

私はその女にだまされた。実際にお母さんとお父さんは事故で死んでいなかつた。

人体実験専門組織の『N.O.N』の人間強化のテストにお母さんとお父さんは使われ、失敗して死んでしまつた……。

だまされた私はその実験に使われた。

実験されているときはとても苦しかつた。体中が痛く、痒く、暑く、寒くて獣のよろづな叫び声を上げて、気絶しては起き、気絶しては起き、そんなことが10時間ぐらい続いた。

麻酔は使われなかつた。使うと実験の副作用と激しく反応し、死んでしまうらしい。

実験が終わり、気がつくと体が軽く感じられた。

周りを見渡すとあの女がいた。

「お疲れ様。辛かつたわね……」

その一言に私はさらに洗脳された。

悲しそうで泣きそうなその顔は演技だつた。だけどそのころの私は気づくことができなかつた。

私は実験成功者①として記録された。

それから私は『N.O.N』に入った。

それ以外私が生きれる道はなかつた。

『NOON』での仕事は写真と名前と住所の書かれた紙を渡され、その紙に書いてある人物を組織に連れて来ることだった。

私は強化実験でとても速く走ることができ、その分蹴りも強かつた。そのため仕事は私にとつては楽だった。

連れて来られた人は別に人体実験に使われるわけでもなく、ただ牢屋やいのに入れられていた。

牢屋に入れられた人は知らないうちにいなくなっていた。
そのことをあの女に、釈放しゃくほうしたと教えられた。

私はその仕事を『警察のようなもの』と教えられていたため、疑うこともなかつた。

私は組織では動物のように扱われ、怒りを感じても抵抗することは許されなかつた。それも普通だと教えられていた。
しかし、ある日あの女に事実を教えられた。

「ここに連れて来られた人はね、殺されているのよ。殺される人はその身に『力』を宿している
の。だから私たちはそれを奪つているのよ」

そう言つて女は高笑いをして、私が何も知らずに人殺しの手伝いをしていたことに恐怖している様子を楽しそうに見ていた。

そう……だから私は組織を抜け出した……。

「うふふ、思い出したみたいですね」
「よくも私を……そんな……ことに……」

怒りがわいてきた、私をこんな風にした元凶。それがそこにいる！

「あらあら、勘違いかんちがしますね」

「何をよー！」

「私は初めてと言つたんですよ？」

「だから何よ！」

「あなたの知つている人は私の母です。私は母に似てゐるので、わざとそう言つただけですよ」

母？そんなはずはない、あの女は10代だった。それに私の目の前にいる女を私より年上……ありえない。

「……確かに母は10代に見えますが、当時は28歳だったんですよ」

……なつ！？

思わずたじろいた。

確かにそう言う人はいるけど、本当にあの女の娘？

だとしたら何をしにきたの？

「……まさか私を……連れ戻す……つもり？」

動揺を隠せず、言葉が途切れてしまった。

「いいえ、違いますよ。私も事実を知り、その口封じに新しい実験体にされそうになつたところを逃げてきたんです」

そういうこと？それにしてもあの女、娘まで実験に使おうとするなんて……狂つてる。

今すぐにでも探しに行つて、殺したい。でも、『力』を奪つているなら私より強いはずだし、それに、私は世界の真理を知つてゐるから、殺しても私の立場が悪くなるだけだし、人体実験の被害者をこれから出さないためと言つても、相当な権力を持つてゐるし、世界は子供の言つことなんか信じしない。

だから殺さない。

そういえば……李秋あいづも言つてたつて、『強い悲しみを感じたものは真理を知る。落ちこぼれは世界をより良く変える力があるが、人をだまし、自分にとつて有利にことを進める悪党になることが多い。それも真理だ。人間の弱さだ。それが世界だ』つて。

私は人の心を読むことは得意だからわかる。李秋あいづが私のためにわざと、イラつくことを言つたりして……そう言つ優しいやつだ。だから……好き……。

おしまいよ。

……世界つてやっぱり悲しいことでいっぱいなんだね……。

そうねえ、でもきっと幸せがくるはずよ。

でも、そう信じて辛い思いをし続けて死んでいく人もいるよ……。もひ、お父さんみたいなこと言つて。そんなこと考えると、本当にやうなつちやうわよ。

あ、そういえば『あの女』の娘の人無視されてない?
そういえばそうねえ……って話をずらさないの。
もう寝るね。おやすみなさい。
もう、しようがない子ね。

(やつぱりこの子はあなたに似ていくわ)

速との出会い

「速。 さつさは大声出してたけど大丈夫か？」

2階から降りてきた速に振り向かずと言った。

が、返事はなかった。

これは追及しない方がいいな。

「さやあつ！」

「どうした？ 桜」

どうやら包丁で手を切つたらしい。 いつものことだが心配だ。
もし指を切り落としたらと思つと母性本能的な何かがくすぐられる。

「あのや、李秋」

「何だ？」

生氣のない声で速が話しかけてきた。

「えつと、あのときはごめんね。……なんか暴れたい気分だったから季秋を巻き込んでボコボコにしちゃって」

「ああ、そのことならもう怒つてないぞ」

沈んだ気分の速は嫌いだ。いつも笑つていてほしいとわ言わない。
でも、辛そうな顔をしているより怒つていた方がましだ。だから…
…だから僕はわざと怒らせるようなことを言つ。
そもそもしないと、辛そうな顔をするからだ。

速のことは気にかけている。でも、そんな僕でも速の過去は知らない。

辛い過去を思い出させるようなことはしたくない。
速が自分から明かしてくれるのを待つ。

明かしてくれたら僕は速に認めてもらえたとわかるから。

「そう？」

「ああ、気にしなくていい。大丈夫だ」

「あのさ、李秋。私の本名知つてたっけ？」

「？ そういうえば知らないな」

どうしたんだ？ 急にこんなこと言つなんて。

「そうだっけ？……私の本名は城原美由紀よ」

「城原美由紀……あれ？」

「あんた、どうしたの？」

「いや……別に……」

おかしいな。また『デジャブ？ 城原美由紀……城原……しろはらー…？』
思い出した！ そんな感覚を感じた。実際には思い出していないがそ
んな感覚が感じられた。

すると、速と初めて出会ったときのことが頭に流れ込んだ。

一年前。電柱の影でうずくまっている少女がいた。
僕は辛そうにしている人を見過ぎるわけにはいかない性格だ。
だから少女に声をかけた。

「どうしたんだ？」

しかし、返事は返つてこなかつた。

「僕はひどいことはしないよ

「嘘よ……」

一回田はなう返事が返ってきた。

「なぜ……なぜそう思うんだ？」

「みんな嘘つきよーみんなみんなお互いにだまし合って生きているのよー」

だまして笑つていろのよーあなたも同じよー同じ気配を感じるわーわー

ああ……この子は真理を知ってしまったんだ。僕よつすじに反応。きつと辛い思いをしてきたのだろう。

僕なんかたいした悲しみも感じていらないのに……。

きつと世界には僕以上の悲劇がたくさんある。だから助けたいと思つた。

「大丈……心配ない。辛……もう大丈夫だ」

そう言つて少女を抱きしめた。

少女は大丈夫?と聞かれるのが嫌いそつた。辛かつたねといふ言葉にトラウマを持つていそつたから、言わなかつた。

「…………な、何すんのよー?」

「安心しろ。僕はいじめない」

「…………えいー!」

「ぐはっ」

いきなり蹴り飛ばされた。

その後も再攻撃をしようとして体制を整えている。
これは逃げた方がいいかな?

「りやああああ！」

また蹴りが来た。でも、こんどは避けれた。
そして少女が空ぶつている隙に逃げた。
僕は普通の人間じやない。だから追いつかれないと思った。
でも、驚くことに少女は追いついて来ていた。

「うわっ！？」
「だああああーー！」

叫びながら走つてくる少女は理性を失つてゐるよう見えた。追いつかれる……。そう思い推定8階建てのビルの屋上に飛び乗つた。

「はあーはあー……魂転者にも体力つてものはあるのに……」

様子を見ようと下を覗きに行つた瞬間、少女が屋上に飛び乗つて
きた。

「マジかよつ！？」

ありえない。少女は魂転者じやなかつた。

僕はたくさん戦ってきたから、負の感情をもつものと魂転者の見分けがつくようになった。……が、この少女は魂転者ではないのに驚異的な身体能力を持つていた。

「当たれええええ！」

何とか少女の攻撃を避け屋上から下に飛び降りた。

「うひ
」

飛び降りると同時に舌打ちが聞こえた。

僕は恨まれるようなことは……魂転者はあるだろしけど、恨まれるようなことはない。……やっぱり抱きしめたのがまずかったかな？

「はあーはあー、さすがに降りればしないだろ？」

そんな期待とは反対に、少女は飛び降りてきた。

「ははは、もう諦めるか……」

10分後。泣きながら怒り、殴ることはやめたものの。
僕は一度気絶したから動けない。寝起きは動けない体质だ。
それに少女が上に乗ついて……。

「うう……『め……んん……』

「え？」

少女は力尽きて倒れた。

「さすがに体力切れか。とりあえず新しく建てた家に運ぶか……」

それが速との出会いだった。

はい。今日はここまでよ。

うん。おやすみなさい。
おやすみ。

(今日は早く寝ちゃったわね。
やつこえは代^{しろ}ハラさんは元気かしら?)

「」の世界（前書き）

「」の世界は『未定願』主觀です。

速との出合い……それを思い出した。

しかし、その記憶はむしろ何10年も昔に起つたような気がする。
デジヤブのよつな……。

それは優神さんとの時と同じ感覚。
でも、僕はまだ16歳だ。何10年も昔の記憶などあるはずがない。

「ちよつと春秋? 何ボーッとしてるのよー。」

「え? あ、ちよつと考え事してて」

「ふ~ん。それよりせ、もう7時過ぎただけど間に合ひの?..」

「え?」

台所から出て時計を見た。

「7時! ?」

7時過ぎだつた。

いつもならもう出てこる時間の10分前。
まだ食事も済ませていない。

「7時つて……桜、今日は急いで食べろよ?..

「あ~……うん」

桜は食べるのが遅いからいつもは早くに作つてこるので……

それよつさつきの、あ~って何だったんだ?

いやいや、それよつじやないって。

「あ、李秋。私の少なめにして
「じゃあ私が食べるね」
「はいはい……。あ、そついえば、あなたは料理少なめにしますか
？」

……名前ないから呼びづらいな。それには

「いえ、私は普通でいいです」

同級生に敬語を使われるのは少し変な気分だな。
……つたく速はいつも少なめだな。ちゃんと食べないと大きくな
らないのになあ。
しかし……あんなに暴れたりするのによくこれだけでエネルギーも
つかなくて、省エネか？

「あー」「ぼしちゃった」「
「えー？」

ああ！時間ないのにー」「ぼすのは計算外だ……。
まあ、水だし大丈夫か。

数分後

「何とか時間以内に食べ終わつたな」
「食べるのにそんなに時間がからないじゃない」
「お前は少ないからだろ！」

何で毎回ツツ「ヨミ入れてんだろ？……。
とにかく、時間以内に食べ終わつたし、そろそろ出るか。

「じゃあ、学校行くぞ」

*

「ほう、もう代ハラを思い出すとは……いや、思い出しているわけじゃないか」

「『未定願』。本当にここが気に入ったようだな？」

『無在』か……本物せりはお前の住む世界じゃないがな。

「いいだらう。じるならあいつを観察できるしな」

「おまえは何が田的だ？」

田的……お前に言つてもわかるわけがない。

俺の世界でもわかるやつなんかいなかつた……。

田をそらしながらそつと思つた。

「お前にまだ言つてもわからない」

「……言つてみなければわからないだらう?」

確かにやうだな。ここは賭けてみるか。

「……教えてやろう。俺の目的は『断言』の『カギを打つ』よう。カギは遊びを終わらせる。しかしお前にカギは見つけられん』を打ち破ることだ」

「……『断言』を打ち破るのは無理ではないのか?」

「?わかったのか?『断言』を知っているのはこの世界にはいないはずだが……。ククク、初めての結果だ。今回は成功するか……?」

「まさか『断言』を知っているとわな
「ああ、知っている。予言ではなく『断言』だろ？確定していると
いひじりだな」

確定している……か、しかしカギはある。見つからないと『ひじり』
とで、ないと『ひじり』ではない。

ククク、カギは見つからない……ならば、見つからないまま使え
ばいい。

例えば、誰かが『大声』を出せば扉が開くのであれば、自分はその
ことを知らずに『叫べ』ばいいだけだ。

「おい！」

「だれだ？」

「ひでえなあ、自分でやひとつたくせによお？」

やひとつ……？ああ……

「そうだつたな『片田の』」

「天ノ姫水城だ『片田の』じゃねえ」

「戻ってきたと言つことは、何か見つけたか？」

「不馬改人が動き始めたぜえ。封印したはずだけどなあ。あと、あ

いつがお出ましだぜえ。お前の言つたとおりのやつだ

「そうか」

しかし、今回は早いな。もう不馬改人が動き出したか。
それにはいつが来たか……。

「じゃあ、行つてくるからな『無在』『いひつは頼んだぞ』
「『ひじり』に行くつもりだ？」

ここに質問していくやつだな。

「雪窗李秋を殺しに行く」

「お、待て！殺すだと？頼むと言ひておいて殺すのか！？」

「それはこいつの本名じゃない。その名が本名のやつを殺しに行くだけだ」

「……」

ククク、今回はあいつの名前を使つたか『優しい悪魔』よ。お前の使う名のやつは俺に殺される……。

仕方のないことだ。殺したくて殺しているんじゃない。

……！――この一つの使う名は毎回違う？『定願』の名を使う……。

『定願』は願いを叶えるかな……。そう言つことか。

ククク、カギのカギは見つけた。あとは俺の得意分野だ。直感で動く！

終わり。今回は少し、謎があつたわね。
ねえねえ、カギってなあに？

カギはねえ、そのままの意味よ。何かを開けるための何かよ。
へ～。

ほら、早く寝なさい。昨日は早く寝たでしょ？
はあい。

(……本来あなたはあの人と結婚し続けるべきなのに、私なんかと結婚するなんて……幽霊の代ハラさん、私は愛する人をあなたから奪つてしまつたわ。もう成仏なんて……できないわよね。ごめんなさい……)

カギのカギヒトリの前

光と闇とが交差する空間。

不気味とも美しいとも言える空間。

「ククク、久しぶりだな雪宮。何年ぶりだ？」

「黙れ異端者が！……しかし、あいさつはしようか。久しぶりだ。8千4百兆6億2百5十万9十九年ぶりだな」

……相変わらず細かいやつだな。

それと、相変わらず空間のセンスは悪いな。

どこを見ても同じように広がり、流れている光と闇。しかし、足場はある。

「異端者よ。なぜこんな世界に歪みの生まれる行為をする？」

「お前にはわからん。……『断言』を知っているか？」

「何だそれは？」

やはりか……。

諦めて、ため息を吐ぐ。その息は白く広がった。

それはこの空間の温度が低いことを教えた。

『定願』は温度を感じないため、息が白くなるかぐらいでしか調べる方法はない。

この温度……氷系魔法を使う氣か？それともいつものアホで温度の調整を忘れたか？

「雪宮。また温度調整を忘れたのか？……確かに、前に会った時も温度が低かつたが……」

「だ、黙れ異端者！氷系魔法を使うからだ！」

「アホだな。動搖から忘れたのもわかる。それと使う魔法をばらしてどうするんだ……。」

この程度なら温度を上げても気づかないだろ？

「お前は何年たってもミスが多いな」

「黙れえええ！」

やう雪面は叫ぶと襲い掛かつてきた。

「やれやれ……困ったやつだ」

やうつぶやき、『未定願』は業火を放つた。

「ぐあ……っ！？……なぜだ！なぜ氷系魔法が使えない！？」

「やはり温度を変えたことに気づかなかつたか……それと自分で暴露したことでも気づかなかつたか？」

「……っ」

動搖と怒りを見せ、立ち上がる雪面。だが、膝から崩れ、手をついた。

想像以上のアホだな。いくら強くても、ミスが多ければ意味がない。

「くそあ……！」

必死に立ち上がるが、また手をついた。

「俺はお前と話しているうちに魔力を高め、準備をしていた。

お前みたいに瞬時に準備した魔法とは格が違う

「話している間だけでこんな強大な魔法は使えないはずだ…」

「ククク、実はな、お前と会う前から準備をしていたんだ。お前のことだからどうせ空間調整をしていないと思ってな」

「ククク、笑いがこみ上げてくるな。これほどどうまく行くとは……ククク。

「その妙な笑い方はやめろ！…」

「話を聞け」

「話を聞いていないとはもうアホとしか言えんな。

呆^{あき}れて手を額にあて、上を向いた。

俺の業火を受けて死ななかつたやつは一人だけだ。もう、勝負はついた。

あとは、燃え尽きるのを待つだけ……。

「じゃあな雪宮。聞きたいことはあつたが、さよならだ」「聞きたいことだと？」

まだしゃべれたのか……聞くとするか。

「ああ、カミ・シャ・ドロクスは元氣か？」

「……そいつはもう……死んだ」

「そつか……サヨナラ雪宮」

そう答えたとき、すでに雪宮は燃え尽きていた。残つたのは一滴の涙で固まつた灰だつた。

悲しいな、かつての友人を殺していくのは……。

それに、もうあいつも死んだのか……ククク、未練だな、こうして毎回灰の塊を拾い、保管しているのは……。

今日はこれで終わりよ。

そういえば、お母さん前にカミ・シャ・ドロクスって言つてたよね？

ああ、それね。彼は私の友人で、昔を思い出しちやつて、思わず

つぶやいてしまったのよ。

そんなにいい人だったの？

ううん。最低な性格だったわ。でも、死ぬときに全ての人の憎し

みと悲しみを背負つて行つたわ。

でも、今は生まれ変わってるけどね。

へへ。

もう寝なさいね。

はあい。

「はあ～、何とか時間以内に食べ終われてよかつたな

今はもう家を出て、駅までの道を歩いている。

「そうだね～」

「といえば李秋。あんた何で孤児院なんか建てようと思つたの？」

「いまさらかよ……もう一年も経つがこんな質問は初めてだ。

「ん？ ああ、建てようと思つたのは僕よりも苦しんでいる人たちがいることを知つて、助けたいって思つたからだ」

「ふ～ん」

微妙な反応だな。

そんな何気ない会話をしているうちに、駅に着いた。

「じゃあ、またな」

「またね～李秋くん」

相変わらず速は返事をしないな……。

手を振っている桜を眺め、電車に乗った。

「あの、李秋さん。私の名前はどうありますか？」

あ、やっぱりどうしようか。

名前がないのはこれから何度も何て呼べばいいかわからない。

「うーん、苗字は雪富でいいとして、名前は……」

「いいですよ、無理に考えなくても。私は大丈夫ですから」「あ、ごめん。明日までに考えておくれ」

しかし、困ったことになつた。

名前を考えるときは、相手の特徴などで決めていたから、彼女とは会つたばかりで、よくわからない。

……速は足が速いからで、桜は桜が好きだからで……
だめだ……全然思いつかない。

「李秋さん」

「え、何？」

「私は学校に着いたら何をすればいいでしょうか？」

「ああ、職員室に行かないといけないから僕が案内するよ」

「ありがとうございます」

……とは言つたものの、僕たちは遅刻ギリギリに登校する」とことなるから、

一緒のことを見られるのはまずい。

なぜなら僕が雪富李秋だということは教師の一部だけと言つ」とと、僕と女性が一緒にいると、厄介な連中に絡まるからだ。ばれないように校舎に入るにはどうしたらいいのだろう。

裏門は遅刻してくる生徒が遅刻がばれないようにこつそり入つたり、不良の溜まり場のようなところだから無理だ。

正門は遅刻してくる生徒をチェックするため生徒指導の教師がいるため無理だ。

東門は……グランドだし、教室から丸見えだ。

いつそのこと気絶をして屋上に跳ぶか……いや、やめておこう。

「李秋さん。どうかしましたか？」

「あ、いや、一緒にいるところを見られるところと厄介だから……」

「……やつ言つことでしたか」

ああ……もうすぐ学校に着いてしまう。

僕の学校は駅を降りてすぐだから、もう時間がない。

あ！ そういえば、学校にいるときに警察から犯人逮捕協力要請が来たときに使う脱出路があった！

よし。これで問題は全てクリアだ。

ん？ そういうばもう一つ問題があつた！

僕は学校では違う名前を使っているから彼女に伝えないといふ……

「あの、すみませんが、僕は学校では違う名前を使っているので、
宵と呼んでください」

「あ、はい。わかりました」

これで問題はもうないだろう。

「じゃあ、先に教室に行つてくのから

「あ、はい」

職員室に彼女を預け、教室に向かった。

職員室に寄つたので表向きには遅刻だ。

「はあ～、こんなことばかりだと単位はとれないな

孤児の人に入学等のことでのことで学校を休んだりしているから学校では不良として見られている。

しかし、お金は十分にあるため、生活には困らない。

「そろそろ授業が始まるな」

「うつぶやくと、誰かが近寄つてくる気配がした。
振り返ると、学校での数少ない友達の鋼峰 紀美夜がいた。

「おはよー。ゆ・きみやくん」

「相変わらずだな。あと、『ゆ』と『きみや』に間を入れるな
『いいじゃん。私と同じ前になるからセー』」

彼女とは入学したその日に知り合つた。

僕に絡むようになったのは言つてもないだろう。
彼女はよく男子と一緒にいることが多いが、男子は少しつざこと思
つていて。
もちろん僕もだ。

「ねーねー、ゆ・きみやくん」

「何だ？ あと間を入れるな」

「今日転校生がくるんだってー」

「知ってるよ」

……ああ、なんだかお約束みたいになつてきた。

「なんだ知つてたの？ ジャね、バイバーイ」

嵐みたいなやつだ……。

「よつ、宵。あのセーマジで紀美夜と付き合つてねえーのか?
「何度も書つが違つ」

なんだか紹介するのが面倒だ。友人Aでいいだろ？。

「相変わらずクールなお前。あ、そういうえば転校生来るんだってな」

「さつき紀美夜に聞いたから知っている」

全くマイペースなやつだ。

僕以外に友達いないのも当たり前だな。

「あつそ。じゃあな宵」

「ああ、じゃあな友人A」

「なんだよ友人Aって！俺は真田さなだ 油介ゆすけだよーなんていきなりそんな呼び方するんだよ！」

めんどくさいやつだな。マジで友達僕以外にいないだろ？。かわいそうなやつだ。

「ああ～、そうだったね？サラダ油くんだったね」

「やめるよーそのあだ名、お前が言い出したからみんなにからかわれるんだぞ！」

「そういうばそうちたな。愛するお姉ちゃんにも呼ばれちゃったシスコンのサラダ油くん」

「なに暴露してんだよーシスコンってー」

えー？マジでシスコンだったのか！？

これは重大発表だな。

「……冗談で言つたつもりが本当だつたのか」

「え、あ、ちがつ」

「」のあと、サラダ油は叫びまくって職員室に呼び出され、転校生を見ることができなかつた。

「では、真田くんも職員室に行つたそつなので、転校生を紹介します」

先生がそう言つと、生徒たちは騒ぎ始めた。

そして、転校生が入つてくると男子たちの騒ぎが激しくなつた。美人が転校してきたことに喜んでこるのだろう。

「では、自己紹介をお願いします」

やういえば、名前ないのにどうやって自己紹介するのだらうか？

「あの……私は雪宮です。事情があつて今は名前はありませんがよろしくお願ひします」「

よかつた、ちゃんと自己紹介ができた。

「えーっと席は、雪宮君へんのとなつが座るといつても座つなさー」

なぜか、先生がそつぱつて、彼女が座るとわざわざわとなつた。会話を聞いてみると……

「ねえ、雪宮って雪宮君と苗字同じよね？」「うんうん。しかも席となり同士だよ」

とこの会話が聞こえた。

しました。苗字が同じなのを教わっていた！

はい。終わりよ。

今回は学校？のお話だね。学校って楽しそうだね。
そうね。私たちには学校と言つものがいいからね。
私学校に行きたいよ。

そうねえ。お父さんならできるかも知れないわ。
本当！？早くお父さん帰つてこないかなあ。
うふふ。もう寝なさいね。
はい。

平和

苗字が同じだった！

心の中で叫んだが、すぐにその不安は消えた。

なぜなら雪面という苗字は孤児院にいる子供の約半分につけているため、この地区では有名な方だからだ。

そんなことを考えている内に1時間目は終わっていた。

当然のことだがクラスのほとんどが転校生に話しかけている。いきなり大勢に話しかけられて戸惑うのも無理はない。

それからも休み時間になる度に話しかかれ、4時間目には結構やつれていった。

助けたいという気持ちはあるが、そんなことをしたら敵意のまなざしを向けられるようになるだらう。

「ねえ？ ゆ・きみやくん」

「何だ？」

僕が心配そうに見ていたら前の席の紀美夜が話しかけてきた。

「ゆ・きみやくん。転校生に興味があるの？」

「いや、興味といつよりは心配だな」

やや怒り気味に尋ねてきた。たぶん他の男子よりもかまってくれる僕にかまつてもらえなくなるかもしけないと、つい嫉妬だらう。それよりも間を入れないでほしい……。

「心配？」

「ああ、見た感じ結構疲れてるからな」

「やっぱり優しいんだねー」

「やっぱり?」

やつぱりと言葉に疑問を持った。

僕は誰にも優しくした覚えはないからだ。

「うん。だつて中学生のこいつ不良に絡まれてたとき、助けてくれたから」

「そんなことあつたか?」

「あつたよ。それに、ゆ・きみやくん雪宮季秋なんでしょう?..」

「...!?..」

僕はあまりにも突然だつたため、絶句した。
なぜ知っているんだ!?と何度も心の中で言つた。

「やつぱり……やつなんだね」

パニック状態になつてゐる僕を見て紀美夜は言つた。
もつ、『まかすことはできない。

「いつ……気づいた?」

「おい、鋼峰。授業中だ、前を向け

「あ、すみません」

.....聞を出す前に先生に注意された。

いつたいいつから気づいていたんだ?

幸い、生徒が結構騒いでいたため、さつきの話は聞かれていない
ようだ。

そのまま授業に集中できずに終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「やつと昼休みか……」

空腹は感じなくとも、体は食べ物を欲している。

複雑な気分だ。

そんなことを考え弁当箱を取り出そうついと思い、かばんを開けたとき、外から聞き慣れた声が聞こえた。

「秋ーーー弁当箱ーーー！」

速の声だった。

その言葉を聞いてかばんの中を見たら、弁当箱が無かつた。

「秋！窓開けてーーー！」

言われるままに窓を開けると、速がジャンプしてちょうど開けた窓から教室に入ってきた。

「秋！私のかばんに間違えて入れたでしょーーー？」

「あ、ごめん。……わざわざ届けに来てくれたのか？」

「そうよーーー！」

周りを見渡みるとみんな驚いてこちらを見ていた。
いきなり女の子が3階の教室に飛び込んでこれば驚くだろう。

「ゆ・きみやくん。この子だれ？」

「えつと、妹みたいな関係……」

「妹なの？」

「つ……」

強い口調で聞こされた、動揺を隠せない。

「違うわよー私は義理の妹よー。」

「やうなの?」

「やうよー。」

「へえー。」

助かった……。

あとで色々と要求されそうだ。

無茶なことを言わなければいいが……。

「ところどな前は?」

「雪面速よ。…………あんた」「こいつの彼女?」

「違うわよ。」

「やう。」

なんてこと聞いているんだよ……。

まあ、何とかなりそうだし大丈夫か。

「ちょっとー何のやねぎですかー?」

少し落ち着いてきたところ、僕が一番恐れている人の声が聞こえた。

「あら~李……宵。こんなところで会えるなんて奇遇ですわね?」

来てしまったのかー? ヒカル葉瀬 母音。

「まさか、年下……それも同じ学校の生徒だったなんて驚きですわ」

お母さん? 寝ちゃったの?

あら? 「ごめんね。少し疲れているのかしらね?

お母さん大丈夫?

大丈夫よ。ほら、もう寝なさいね?

うん。おやすみなさい。

来てしまったのか戸葉瀬 母音！？

「何で姉さんが！」……！？」

と驚いたように叫んだが、この学校にいることはすでに知っていた。
なぜならこの学校に入ったときにチラッと姿を見たことがあるからだ。

「あり？ 風紀委員ですから騒がしいこのクラスに注意をしに来ただけですか？」

しまった！ もう見つかってしまったか……。

ああ、今まで築き上げてきた学校でのイメージが崩れてしまっている。

「ちょっと秋一の女だれ！？ 姉がいるなんて聞いていないわよー。」

「いや、これは……姉というわけじゃ」

「あとで聞くわー……それよりあんた誰よー？」

「何であとで聞くって言つておいて別の人聞くんだよ……。

それより早く速を止めないとまずい！」

「年下にあんた呼ばわりされるのは少々腹が立ちますわね……いいですわ、もう鬪う気があるようすで相手をしてあげますわ」

「わかつてゐるじやない。それならボコボコにしてあげるわー。」

ああ……予想ビリツに闘つつもりだ。

「ちょっと待て！姉さんと闘つちゃだめだ！」

「なつ、何ですよ！？」

「いいから早く学校に戻れ！」

「……わかつたわよ。戻ればいいんでしょう！」

そう言つて速は窓から飛び降りようとした。

「あ、速。弁当ありがとう」

「なつ、…………言つのが遅い！」

「じめん」

何とか止められた……。

姉さんと闘わせるわけにはいかないからな。

姉さんと言つても実でも義理でもない。

単にそう呼ばされているだけだ。

「あらあら。せつかく久しぶりに手ごたえのありそつな子でしたのに。……まあいいですわ。宵が同じ学校の生徒だとわかりましたしおかわいがれますわ」

ひどく背中に悪寒が走るのが感じられた。
もう僕の平和な日常が終わりだ……。

「宵。まだ次の授業まで10分もありますし、私と少しつきあいなさい」

「えー、ちょっと引つ張らな」

「あら、何ですか？」

「いえ、何でも……」

姉さんのことだから放課後までつきあわされるに違いない。
でも、逃げることは無理だ。

「あなたと会うのは久しぶりですわ。ゆっくりお話しします」

「あの……姉さん。そろそろそのしゃべり方やめませんか?」

「やめるつもりはありませんわ。お母様との約束ですから」

「そ、そうですか」

なぜこんなにもおびえているかと言つと、昔、まだ優神さんと出会っていない小学生のころ。僕は姉さんによくかわいがられていたからだ。

姉さんは幼稚園のときから合気道と柔道を習つていて、誰も逆らう人はいなかつた。

でも恐れられていたわけではない。

なぜなら、とてもやせしく、気が利いて、みんなを笑顔にしていたからだ。

僕とは違う学校だったが、町では有名人で友達のいない僕にまでその情報は届いた。

でもなぜ僕がそんな人にかわいがられていたかと言つと、学校の帰りに偶然姉さんとすれ違うときに、ぶつかつたけど謝らなかつたことが一番の原因で、姉さんはいい人でい続けることにストレスがたまっていたときに僕が偶然にもぶつかつたからだと言つていた。

それから一年経つて姉さんとは仲良しになり、合気道を教えてもらつ師匠と弟子の関係になつた。

しかし、小学校を卒業してからは全く会わなくなつた。

そして僕が魂転の能力を手に入れたあと、また姉さんと会つた。

姉さんは以前よりはるかに強くなつていた。

久しぶりに手合させをしたが、魂転の能力を得ているにもかかわらず攻撃を当てるこすらできなかつた。

全ての攻撃を完全に読まれ、なすすべなく負けたあと、また弟子になつたが、雪宮 李秋とばれてしまい、弱みをにぎられまたかわいがられることになつた。

修行はとても厳しく、後ろで落ち葉を落とすのを皿をつぶつて取ると言つものだつた。

中学を卒業してからまた会わなくなり（犯罪者逮捕のため1年ほど費やしたため、姉さんは1学年離れた）高校に入学して今のこの状況にある。

「そういうえばあなた……魂転者ですわね」

「なつ！？」

突然の言葉に少しの間言葉を失つた。

「ですから、わたくしも魂転者ですわ」

おしまいよ。

.....

あらあら。途中で寝てしまつたのね。

（本当にかわいい子。

早くお父さん帰つてくるといいわね。）

少しづつながらも世界は変わつてゆく

「よお『未定願』。情報を持つてきてやつたぜえ」

「水城か。お前も苦労しているな」

「へつ、苦労はしてねえぜ。むしろ面白くて楽しいぜえ？」

「……そつか」

全く変わつたやつだな。

まあ、その方がいいか……

「どうやら、どんどん不馬改人が活発になつてきてやがるぜえ」

「ククク、予想どうり事が動いているよつだ」

「まあ、俺もこいつがどうなるかは楽しみだが」

「お前はもう好きにしり」

「なつ……ー?」

相変わらず今回も同じ反応をするな……

そつ何度も繰り返す世界は本当に変わつてきているのか？

呆れた顔で上を見上げた。

だが、そこには永遠と同じ空間が広がつてこる。

万華鏡のように合わせ鏡をしたような風景。

永遠と続くその光景はまさにこの世界のようだつた。

「言つた通り、好きなところへ行け。不馬改人と手を組ぶのもいいだろつ」

「俺はもう用済みつてことかよお！」

「ククク、用はある。それはお前が考えてすることだ。指示を出す必要はない。お前が思つた通りにしり」

「……いいだろつ、やってやるぜえ。だがその前に聞きたいことが

ある。本当にこれでいいのか？」

「いいわ、これは『予言』だからな。必ずしなければならない」

所詮^{しょせん}ここにまでしか合つていられないからな。

あとは今回の『予言』を遂行するしかない。

そんなことを考へているうちに水城は無言^{むごん}で去つていった。

「もう行つたか……なら

」

「ふふふ、わかつておる。我が主^{おも}よ」

「詠歌^{えいが}か。今呼ぶところだつた」

「当たり前のこと。毎回同じ時刻に我を呼ぶ」

「そうか」

もう数え切れないほど繰り返しているからな。

わかつて当然か……

「それにしても主よ、暫時^{ざんじ}考えておつたがもつと美しい我が名はないのか？」

「時を詠み、歌う……お前に合つてているではないか。それとも『母^は体制^{たいせい}』の方がいいか？」

「……つ。仕方あるまい、詠歌でよい」

俺が創つたとはい、こんな性格の女になるとは……
短くため息を吐き、顔に手を置いた。

「……それで、今回は本当に『母体』なのか？」
「つむ、いやつ以降『予言』が頭に入つてこぬ
「そうか。……それよりこいつはまた同じことになるのか？」
「どうしても避けることはできぬ。我も心痛むが仕方あるまい」
「……そうか」

どうしても避ける」とはできない。いや、どうしても避けなければならないと言つ方が合つてゐるか。

またこいつに悲劇が訪れるのは俺も心が痛むな。

顔に置いていた手を下ろし、下を向くと、下も同じような空間が広がつていた。

が、自分の足場に小さな黒い光が少しずつ増えていた。なるほど。『黒光』があるといつことにはやはり『母体』か。

「クククククククク……。これは楽しみだな」

蝉のよつな笑い声が永遠と静かに響く。

『黒光』もそれに答えるように静かに揺れ、変わらず少しずつ増えていた。

はい。今田せまいまだよ。

お母さん。

どうしたの?

『黒光』ってなあに?

黒い光よ。

こんななの?

え! ? いつからできるよつになつたの! ?

うーと、なんとなく今できるよつになつた。

そう……とにかく今日はもう寝なさい。

はあい。

(やつぱりあの人のお子ね。でも、嫌な予感がするわ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9616v/>

「未定」の書

2011年11月20日13時01分発行